水上勉全集 17

水上勉全集

17

水上勉全集　第十七巻

昭和五十三年一月十日印刷
昭和五十三年一月二十日発行

著者　水上勉
発行者　高梨茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話(五六一)五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七八

目次

古河力作の生涯　3
鶴の来る町　293
あとがき　495

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

古河力作の生涯

一　章

若狭の生家から、城下町の小浜まで買い物にゆくのに峠を二つ越えた。四里はあったろう。途中は美しい海岸で、白砂のえぐれた入江があったり、原始林の岬がつき出ていたり、恐い坂道があって見あきなかった。母はよく岬の端の高みへきて一服した。半島の先端にある村や、島の名を教えてくれた。波しぶきのたつ崖下には、牛が寝たような岩がいくつもあって、まがりくねった細道がのびている。波打際に一軒家がある。家の裏はせまい砂浜で、くり舟がつながれている。墨絵のようなけしきだった。子供の頃だからただぼんやり見てすごしたが、そこらじゅうにあった巨松と、赤土の道と、島々のかすんだけしきだけは、いまも瞼から消えない。十歳で母と別れて、若狭を出て京都の禅寺で暮らし、その後、故郷へ帰らず、今日東京で暮らす私は、眼をつぶって若狭を思うとき、かならず、この城下町へ向かう途中の海のけしきがうかぶのである。人間の歴史とはいくつかの風景画でしかないといった人がいる。なるほど、瞼の壁に焼きついてはなれない故郷の海岸は、私にとって、郷愁のネガだというより、もはやこころの根につながる絵なのだろうか。

のっけに、こんなことを書くのは、じつは、いま手許にある古河力作さんの、少年時代に珍重

したといわれる豆手帖を繙いていて、そこに、私が母とよく一服して海を眺めた場所からでなければ眺められない、若狭海岸のけしきが描かれているからである。豆手帖といってもいまの人にはわかりにくかろうが、名刺の半分ぐらいの大きさでマッチ箱ほど厚い。少年雑誌の付録にでも入ってきた手帖である。力作さんは、少年時から、異郷に暮らしてもこの手帖は大事に所持していたとみえて、死後、その持ち物の中から発見されている。手帖は、よく子供が丹念に描く乃木将軍や西郷隆盛の絵であったり、小遣銭出納のメモであったり、先生や誰かの似顔であったり、くだけた尻とり唄のおぼえ書きであったりして、読んでいても楽しいが、私の判定するところでは、これは力作さんが十三、四歳からのメモといってよい。第一頁に、4Bか何ぞの太い鉛筆で山と海のけしきが描かれてある。まず眼につくのは峰のとがった富士型の青葉山である。手前にやや濃いめの内外海半島があり、左手前に接近して山が突き出て、少年の筆にしては、遠近法にかなったみごとなスケッチであるが、このけしきは、青井岬の端の高みからでないと眺められない。山と半島の手前は白い海だ。一艘の帆かけ舟がういている。空には雲が走っている。若狭を知る者にはこのけしきはどこか淋しい。

青井岬の曲がり角から、小浜町へ降りる手前に、えぐれた谷があって、六呂谷とよばれている。谷の入口にいま火葬場が建っている。そこへ登る道の片側に、「妙徳寺参道」と彫字のある標石が、気をつけていなければ見すごすくらいの場所にかくれてある。自転車ものぼれないぐらいの坂道である。歓喜山妙徳寺、あるいは文殊峯と町の人びとがよぶ曹洞宗永平寺派の古寺へゆく道である。この寺の墓場に古河力作さんは眠っている。私が、岬の端から、力作さんが西を眺めて

描いたであろう十三歳頃のスケッチを思いだすのも、じつはこの山に眠っている力作さんの霊に深い感慨をおぼえるからである。力作さんは少年時に写生したけしきのうしろ山で眠っている。

古河力作さんのことは、世に「大逆事件」といわれる天皇暗殺謀議の罪で、明治四十四年一月二十四日に、東京市ケ谷で死刑を執行され、三日後二十七日、下落合の火葬場で焼かれたので、知る人も多い。歴史家は、力作さんのことを、若狭小浜郊外の雲浜村に生まれて、算え年二十歳で東京に出て、(じつはそれまでに神戸在住の丁稚期間があるのだが)滝野川の草花園で園丁をつとめているうち、社会主義を信奉するようになり、幸徳秋水や管野スガと往来するうち、大それた陰謀に加わって処刑されることになった、二十八歳の小男だと記しているけれども、不思議なことに力作さんが永眠する寺の名さえ正確につたえた人は少ない。『革命伝説』の労作を成し遂げた神崎清氏も、青中山と記している。青井山のまちがいで、妙徳寺は正確には歓喜山といい、地籍は「青井」にぞくしているのである。背山を青井山(やま)といい、いまは新国道が岬にトンネルをつくって貫通しているけれど、私や力作さんが少年だった頃は、まだ青井山が海へなだれ落ちる端(はた)を曲がらねば、小浜町へも、私の村へもゆけなかった。

大逆事件は無謀な法吏によって十二人の死刑囚をみたことで結着がつけられている。この明治四十四年の不幸な出来事については、私は生まれていない頃のことなので、大きくなってから知った。しかし、子供心に誰から教わったか、「西津の主義者」ということばの記憶はかすかにある。西津というのは力作さんの生まれた土地の名だが、ここから「主義者」が出たと村人は噂していたのだろう。子供に「主義者」なぞということばが、何を意味したかわかるはずもなかった

が、何か暗い影をおびて耳につたわり、母につれられて小浜へゆく途次にも、町はにぎやかな家なみで眼をうばいはしたけれど、その町の向こうの村に主義者がいたといった関心は確かにあった。私が生まれたのは大正八年のことだから、力作さんの処刑があって約八年後である。その頃にもまだ、力作さんのことが村人に恐ろしい禁句として、低くささやかれていたのである。そういえば大正十二年は関東大震災があり、大杉栄が虐殺される事件がつたわっているはずだから、なおさら社会主義者ということばは村人の口にのぼったのかも知れぬ。私が小学校へ入る頃は大正デモクラシーの末期である。十五年十二月は大正天皇の崩御である。昭和に改元されたその元年は数日で終わり、翌二年をすぎて、三年は御大典であった。満州事変や上海事変に突入してゆく軍国主義時代がはじまる時期で、「西津の主義者」ということばは、誰の耳にも恐ろしいものの代名詞とうけとられはじめた頃だ。これは、奇妙な感覚だが、私には、「悪いことをすると警察へつれてゆくぞ」と親が脅した時の、あのうす気味悪い恐ろしさとつながった。

力作さんのことは、処刑後に発見された手記や「遺言」によって、事件にかかわる経過や心境のあらましがあらかたわかっている。草花栽培の園丁をつとめた人柄とは似つかぬ天皇暗殺の陰謀荷担といわねばならないが、その力作さんが、なぜそんな事件に加わらねばならなかったかということも、いまは、史家によって、謎は謎のままながら、ある程度の確かな推断もなされているとみてよい。「遺言」でも、力作さんは、非墳墓論者ですから墓はつくらないで下さい、といい、そんな金があるのだったら、おいしいものを食べて下さい、と社会主義者らしく、父慎一氏に死後のことについて遺している。それにもかかわらず、遺族の方たちが、生家からかなり離れ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

た青井山の中腹の寺にひっそりと墓をつくって葬っているのは何故だろう。私はいま、力作さんの少年時の手帖の絵をみていて、この因縁に驚くとともに、力作さん自身さえ、ここに眠るとは思わなかったろうことに思いを馳せて眼頭が熱くなる。墓はいらぬといいのこして処刑された人は、「西津の主義者」といわれ、その名さえいうことをはばかられたが、やはり郷土の一角にお父さんに抱かれて眠っているのである。墓は親子一基である。

寺へ至る道は急坂道の淋しい一本道だが、ふりかえると美しい紫紺の海がみえる。路端は春ならば、いくたの野草が咲き、山には小ぶりの桜も咲く。冬は落葉樹の混じった松の下道に雪がつもり、山門に至る道は風光絶佳だ。妙徳寺は、禅宗寺であるため町なかの真宗寺のような明るさはない。山かげにぽつんとかくれるようにしてしずまる禅道場である。墓地は庫裡の手前の土蔵よこをまわって、寺の裏側に面した小高い丘にあるが、墓石の林立する中央のあたりに、「三島氏」と彫られた墓石群がみえる。そこの一基に、「応声院慎道全逸居士」と戒名のあるわきに、「還源院行山恵力居士」と小さく彫られてある。応声院は父慎一氏であり、大正五年八月二十二日没とある。還源院は力作さんのことで、明治四十四年一月二十四日没とある。処刑の日である。

力作さんの墓に詣でて、還源院行山恵力居士と口ずさみながら、この戒名が示す意に思いをふかめて私は合掌した。還源とは、源へ帰る意であり、行山とは山へ向かう意であり、恵力とは、心を他につくすめぐみの人、力作さん……といった意でもあろうか。同じ禅派でも、臨済派に得度した経歴をもつ私は、禅寺の和尚が戒名をつくる際に、亡者の人となりをよく研究して苦心する経過を知っている。戒名は、下落合火葬場で荼毘に付された際、死体引取人であった堺枯川氏

が依頼したところの東京道林寺の住職の作である。力作さんの生涯を偲ばせて心あたたまる「名づけ」のような気がしてならない。

「灰色の獄窓につながれていても、彼のまぼろしの花壇のなかでは、バラやチューリップの花がうつくしく咲き乱れていたにちがいなかった。すでに死刑の宣告をうけた彼が、ちかづいてくる死の足音を聞きながら、べつにおびえる風もなく、世話になった園主にあてて、経営上の改良方針や注意事項をこまかく書きのこした心のおちつきは、全く驚嘆すべきものがあった。彼は、公判廷において、花を愛する園芸業者から犯罪人を出したことはほとんどないと語っているが、平和でうつくしい自然からうけた精神的な感化のふかさを語りたかったのであろう」

とは神崎清氏の、力作さんの残した文書をよんでの感想である。これは力作さんへのふかい愛情である。花つくりにいそしんでいた二十六歳の若者が、どうして天皇暗殺という恐ろしい謀議に参画しなければならなかったか。そこのところを解くはっきりした資料はないけれど、いま、ここに私が「古河力作の生涯」と題して、同郷の社会主義者の人生に私ながらの記録を思いたったのも、じつは花つくり人が犯罪人とならねばならなかった謎へのかすかなアプローチを試みてみたい念願があるからにほかならない。

もとより、私に「西津の主義者」への愛情はあるものの、史家よりも詳しい知識があるわけではない。私の生まれないころの事件であり、力作さんの生涯でもある。資料は、史家の著書や、現在その遺族の最後の人である令弟三樹松氏に願ってその回顧談を借りねば任を果たすことは出来ないが、谷一つへだてた若狭の海を瞼に描いて他郷に暮らした力作さんは、花つくりの園丁で

若き生涯を終えたけれども、若狭を捨てた私の望郷のけしきの中にこの人はいる、それは疑えぬ。

二　章

古河力作は、明治十七年六月十四日に、福井県遠敷郡雲浜村竹原第九号字西作園場九番地に生まれた。父は慎一、母は八尾といった。長男で弟妹があった。次男三樹松、長女つなである。父慎一が古河姓を名のったのは明治のはじめ頃で、それまでは三島姓であった。なぜ改姓したか理由は詳らかではないが、妙徳寺過去帳には慎一氏が改姓した記録がある。三島家は西津の旧家古河屋の分家だった。古河屋は小浜近在では名のとどろいた富豪で、昔は加賀の銭屋五兵衛とくらべられたほどの廻船問屋で、大きな帆掛船を九艘もっていたといわれている。もっとも、力作が生まれた明治十七年頃は、江戸時代の羽振りはなかったろうけれども、宏大な家屋敷や別邸の今日の面影をみても、分家の三島家がそれほどの貧家であったとは思われない。かつての三島家は、現今の市内山根屋旅館の宏大な地籍がその跡であることでも想像できるが、作園場は別宅であったといわれる。『小浜、敦賀、三国史料』に古河屋にふれた一文があるので抜き書きしてみる。

「古河氏は江戸時代中期以後西津において廻船問屋を営み代々嘉太夫を通称とし、小浜地方において第一の斯界の地位を占めた。先祖は石野孫六といい、西津下竹原村で漁業に従事したが、三代教俊（法号宗哲）は廻船問屋古河屋久右衛門に奉公し、享保中ごろに独立し、主家古河屋の別家となって、西津長町で廻船業をはじめ、古河屋嘉太夫と改称した。四代教重のとき、廻船の傍ら酒造をはじめ、六代教泰のとき、寛政ころには家業次第に隆盛となって廻船七艘を有した。古河家の現当主古河嘉雄氏は嘉永三年八月朔日の日附ある廻船絵馬を所蔵するが、栄宝丸、嘉明丸等九艘の廻船が描かれており、これは三、四百石より八、九百石に至る。明治元年、一時全廻船を大阪に売却したが、翌年三艘を買入れ、家業を続け、同十三年に廃業したという。八代教成のときである」

力作の父慎一は竹原の作園場に、三島家の長子として生まれたが、その母は古河本家の八代教成の姉にあたるところをみると、三島家は、古河本家と濃い姻戚にあたったとみてよい。慎一の妻やをも古河家の出で、慎一の従妹に当たった。すなわち従兄妹結婚であった。ために、子らに、矮小体軀の血統をみている。力作、三樹松、つな、それぞれ小軀である。富裕な家柄に多い近親結婚の弊が血に及んだと解釈してよいが、古河力作は、つまり、このような、生活に困らない家系に生を得ていながら、矮小体軀だったために、その精神形成に特異な劣等意識を育んできたことが想像される。いま手許にある、大逆事件被告弁護を担当した今村力三郎弁護士のメモを繙いていると、力作の家系に、異常者のいた記録がみえる。メモは今村氏自身の走り書きであるが、

「元首ニ対シ兇暴ヲ加フル意ナシ、古河力作社会主義ヲ捨ツ。力作ノ父母ハ従兄妹ノ結婚。力作

ノ叔母古河チヨ白痴、七、八年前死、力作ノ曾祖父三島孫右衛門ノ妹アサ白痴、力作ノ曾祖父孫右衛門白痴、孫右衛門ノ祖母ヤス白痴、力作ノ祖母古河サクノ弟古河教成狂、力作ノ祖母古河サクノ叔父古河嘉六狂、力作ノ父慎一ノ従弟古河成一（教成ノ長男）ハ現存スルモ頗陰鬱」

とある。冒頭にある「力作社会主義ヲ捨ツ」の一語をみてもわかるように、事件の謀議に参加した力作の心証をその家系にさぐって、力作が元首に兇暴をふるうような人間でなかったことを主張するための記録とみられるが、弁護士の調査であるし、裁判資料になったことでもあるから、事実関係についてはそう虚偽の記述とは思われない。とすると、三島家には、力作の曾祖父時代から白痴、狂人が多く出ていることになる。また、古河成一が鬱病患者であり、その父教成が「狂」であったとすると、八代古河屋が、その家業を廃したと「史料」にみえる記録も、この今村弁護士の記述と符合するようで、かつては加賀の銭屋五兵衛と肩をならべるほどの豪商であり、先祖にはいくたの傑物もいた（『海商古河屋』）古河本家とその分家の三島家には、血族結婚が繰返されていて、その弊によって親族の一部に異常が見られ、宏壮な邸宅で格式を維持して暮らした両家の暗い内側を覗かせるようである。このような血の事情が、作園場の家でうぶ声をあげた力作に、どのような影響をあたえただろうか。史家には興味のある点である。雲浜村竹原字西作園場というのは、小浜市でも西方にあって、南川と北川の合流する中間地の呼称だが、三島家のあった屋敷は、いまは自動車教習場になっていて、昔の面影を偲ぶよすがもない。しかし、この地に佇んでみると、風光の美しい一角であることがわかる。南川と北川は、名田庄、熊川の両谷を流れてきて、小浜湾にそそぐ、この地方では大河である。ちょうど両河川が、海へ川はばを広

げた三角洲の台地の南端が作園場で、海ぎわには小浜城跡と、武家屋敷の名残りをみせる町なみがあって、城下町は、川から西へひらけて、西津村を形づくっていたとみてよい。城から、西へのびる道路をはさんで、漁家と士族の家々が対峙し、その中間部に廻船問屋の古河本家が土塀をめぐらせており、分家の三島家は東端の川ぶちに居を構えていた姿が、土堤の上に佇むとわかるのである。近くに城郭跡の石畳をのぞみ、西に旧城砦あとの後瀬山、その後方に青井山、つづいて多田ケ嶽、さらに東の久須夜ケ岳にはさまる小高い連峰の手前には丸山がみえる。それらをかきわけるようにして、二つの川が山へ吸いこまれてゆく景色が、一望に見わたせる。明治の頃には、家々は低かったであろうから、土堤下の作園場から小浜湾を抱いた二つの半島が、いつも霞の中に眺められたものとみてよい。例の力作所持の少年時の豆手帖には、前述した青井岬の鼻からの写生と思われるもののほかに、この作園場を出て城跡に佇んでのスケッチと思われる海の光景が二、三点あって、「二つ礁」も、「鋸崎」も、「大島半島」も、「赤礁（あかぐり）」も、今日の姿そのままが描かれてある。体軀矮小の力作が、作園場の生家に育った期間に、周囲の風光を如何に愛惜したかがわかるのである。そうして、その風光は、この海辺の城下町の歴史を自ら物語っていたことはいうまでもない。

小浜は足利幕府時代から若狭の守護の居城だった。安芸から赴任してきた武田信栄が後瀬山に城をきずいてから、八代つづいて武田元明が近江に自刃するまで、若狭国の名は、足利家と姻戚のある家柄とともに京都にきこえた。信長の擡頭する戦国時代は、丹羽長秀、木下勝俊、京極高次がこの後瀬城を守った。江戸時代に入って、酒井忠勝が藩主になり、十二万三千石を所領して、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook